
緑色のPianissimo

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑色のPianissimo

【Nコード】

N0634Z

【作者名】

紅碧

【あらすじ】

西暦3090年。感情型ロボットの暁は、シルビアのかつての同級生で、人間の少女マリアと結婚していた。謎の宇宙海賊が太陽系を荒らしまわっている中、シルビアはこっそりと天王星の暁の予言占い店「メトロポリス」を訪れる。

星が綺麗だと思うことと、あの人が好きだと思うことは、同じだろうか。そういう気持ちをずいぶん長いこと忘れていたような気がする。

西暦3090年5月

マリア・ミカエルはヒューマノイド化し、見た目は人間の青年と一寸も変わらない、バーミリオン型ロボット「暁」と結婚した。

天王星で所帯を持ち、暁は日中は土星の大手ロボット製造業会社「サターン」の幹部として働く傍ら、月4回の土曜日午前中のみ、天王星に個人占い店「メトロポリス」を開店営業中だ。ストレス解消と悩み事のはけ口、相談専門だが、人気はボチボチらしい。

会社の幹部に居るのは、潰れかかった経営を彼がみごとに立て直した手腕からだという。また、太陽系連合は新会社としてのアンドロイド製造会社サターンを、人間だけではなくロボットにも参加させる経営体制を実験的に試み始めていた。

占い店は暁にとって趣味の一部でしかない。いわば、彼にとってのストレスの解消の場に等しかった。

人間のマリアは暁がロボットだということを認識している。人間とは違う彼が持つ真のやさしさとは何なのか。マリアは両親に捨てられた孤児である。人間の愛を受けられなかった彼女はそれがなにか知りたいと思うからこそ、人間ではない純粋なロボットの彼を選んだのだが、？。

3090年6月

―占いをしにいろいろ―

爽やかな風が木々の緑を吹き抜けていく。とても今日は気持ちが初夏日和であった。

というのは、1年中、春と夏しかない天王星に遊びにきていたせいだった。

占う、というよりも、この世の運命を、ダイスで決めるように、誰かの意見を聞きたかった。ただ、それだけなのだ。

宇宙海賊が、惑星間を荒らしまわっているという。惑星警察が懸命に取り締まってもかいくぐって悪さを続けているらしい。例の如く、秘密機構の調査局にも呼び出しがかかった。

頭をかかえるブラックを横目に、シルビアは男装して、天王星にこっそりと遊びに来たのである。

「いらつしゃい」

「予言占い店・メトロポリス・営業中」と書かれたエメラルド色の看板の店の奥に入ると店主は、オレンジの豊かな肩まで伸びたストレートの髪を、若草色のバンダナ、モスグリーンの警官服でスリムなボディーを包んでいる、一見美青年ではあるが、大きなバーミリオンの双眸は、人外のものだと一目でわかる。

「暁、久しぶり。肌の色、変わったんだね」

「ヒューマノイド化したのです。マリア様のおっしゃるとおりに」

「結婚した奥さんに、様、つけるの？」

「私はあの方に普段、下僕とよばれています」

「きわめつけの、M、だね、君って」

「ではシルバー様、これを」

といい、ビニール製のトンカチを暁は、カジュアルな大学生風の美

少年に化けたシルバーに手渡した。

「私の占いがお気に召さない時はこれで、おもいつきり私の頭を殴ってください」

「、、、、いいの？」

「私はロボットなので嘘をつけません。お客様のお気に召さない占いもそのまま伝えざる負えません。殴られても大丈夫です。私は痛くもかゆくもない、ロボットですから」

「マリアはこいつ以外とは結婚できまい。何回、暁をマリアはなぐつたんだろう。」

直径20cmほどのエメラルド色の水晶玉を目の前にして、暁は目を閉じた。

「見えます。見えます」

「、、、、なにが？海賊のいるところ？早く教えて。暁」

「、、、、きのうは、。。。。ですか」

「、、、、！」

真っ赤になったシルバーがいきなり、トンカチをふりあげた。「死刑！死刑！死刑」つとビニール製の緑のトンカチが、合成音を発した。

「そういうときいてるんじゃない。真面目に答えろ！インチキ占い師」

「インチキとは失礼な。ちょっとした冗談ですよ。海賊はですねえ」

暁はたたかれた頭のヘアスタイルを整え、バンダナをつけなおした。

「マリア様といい勝負だ。ジュニア様もたいへんですねえ。ええと、

、、小惑星帯の中央に位置しています」

「それはいつ？」

「3日後です」

暁の店のランチはサラダバーとケーキバイキングの1種類だけである。

特にクリーム系とチーズ系を好むシルバーは、4つ持ってくるとサラダとウーロン茶をテーブルに置き、暁の前で食べ始めた。

「この値段でこれだけのもの食べられるって客には嬉しいけど、店としては赤字じゃないの？」

「予想して仕入れられるので、赤字になることはほとんどないんです。それにこれはわたしの道楽ですから」

「道楽？客に殴られることが？」

「お客様たちの幸せそうな顔を見ることが私にとっての道楽なんです」

「ふうん。ロボットってさ。僕たち人間が考えるよりもずっと大人なんだね」

「おとな？」

「成長してるってことさ」

シルバーは黙々と食事しながら、はあーとため息をついた。

「ジュニア様のことでなにか悩みごとでも？天然のあなたでも？」

「、、、うん。いろいろとね」

「占いましょうか？」

「こればかりはねえ。運を天にあずけることしか」

シルバーにとつての目下の悩み。それは暁とマリアには論外の問題であった。普段、ぼうようとした明るい少女に見られない苦悩に、

暁はただ、かける言葉を失うしかなかったのだ。

大学から帰宅すると今日は珍しく、夫が部屋にいる。

「おかえりなさいませ、マリア様」

「ただいま。暁、あたし、今日、特待にえられちゃった。来月から学費免除だつて」

「特待試験に受かったのですか？」

「そうよ」

マリアはベビーピンクのハーフコートを脱ぎ、銀色のトートバッグ

からテキストやら教科書を自分のデスクに並べた

「お金のことなら心配しなくていいんですよ。あなたはなにも心配せずに学校をやめずに卒業するまで続けて下さい。私は会社でもかなり上のランクまで上がれました」

「そんなの政府の方針からじゃない。あなた人間たちに利用されているのよ」

「利用？別に気にしてません。人間の役に立つようにプログラムされている私はどのように利用されようとかまわないですから。マリア様は気になさるのですか？」

「気になるわ。私はかまわなくない。困るもの」

「なぜ？」

「あなたは私のパートナーじゃない！」

「わかりません、、。あなたのために、彼らに利用されるのですしたら、私は本望ですから」

愛という名のもとにという言葉が浮かんた。マリアは、だが、言葉いってもつたわらない相手だと気付き、少しだけ失望した。長い川が彼との間にあるのだとしたら、それを埋めるのは自分の任務、つとめなのかもしれない。人間としての。

食事を終え、シャワーを済ませた彼女はメンテナンスを終えた暁とともにベッドに入った。メインのライトを消すと、頭上のサブライトの夕映えに似た、やわらかなオレンジの灯りがあたたかい。

「海賊の居場所はわかったの？」

「はい」

「いつ来るのかも」

「ええ。シルビア・ハイト様に今日、店で占って差し上げました」

「シルバーに？話したの？」

「ええ。お客様ですから」

「海賊はA級ランクのエスパーたちだってしってる？」

「そのようですね」

「暁。あなたはそれにかかわらないでほしいの。あなたはきつと軍に利用されて、そして」

「そして」

「彼らにボロキレのように壊されるのよ」

「、、、、マリア様」

「海賊たちの襲った宇宙船に残されたマークは、LARKの文字だったよね？」

「そうです」

「皆殺しっていう意味だって昔きいたことあるの。パパに」

「パパ？」

「私を置き去りにした人間」

ヒューマノイド化した暁は、人間の男性と外見は寸分も変わらなかった。御手洗潤博士のレプリカだという彼は、端正でインテリジェンスな容貌を持ち、それでいて草食系ともかけはなれた鍛え抜かれた体躯であつたがため、アンドロイドで人間の妻帯者だというのに、マリアはたびたび、占い店に通う客たちからの、プレゼントやらラブレターやらを持ちかえる暁に、尋常ならぬヤキモチを焼く。

一方、ベッドの中の暁はただ自分中心に奉仕してくれる。与えられるだけの愛。それは、幼年時代、親、に置き去りにされた、マリアが愛に飢えているのに気付いているのかごとく、暁は貪欲な彼女を満たしてくれた。

だがー。

マリアは目を閉じた。

淡いオレンジ色の灯りの下。

少女は暁の髪の色オレンジが大好きだった。

太陽よりも少しばやけた灯りの中で彼女は、やがてひとつになった、

暁と口付けした。マリアは自分の中に、抱きしめられた暁自身を感じながらも、次のような問いをかけずにはいらなかった。

「私もあなたに必要とされたい」

「私にはあなたが必要です。あなたのために私は生きているのですから」

「それが幸せだと?」

「幸せです」

これでほんとうにいいのだろうか。でもなにも考えまい。今、この瞬間だけは。

「あつ夕食つくってくれてたんだ」

テーブルの上にのせられたサラダ、カキフライ、スープ、ライスなどを見て、シルビアは感激した。

「早く帰宅できたんでな」

「木星の方は、大丈夫だった?」

「あそこは大丈夫だ。もともと流刑地だしな」

「今日天王星にいつてきたんだ。星間アカデミー休みだったから」

星間アカデミーというのは海王星にあり、おもに訓練校を卒業したエスパーたちの大学のようなもので卒業すると様々な資格を取得し、自分の希望する職種に就職するシステムとなっている。

「なに占ってきたんだ?あのインチキ占い師の、みかん頭のところにいつてきたんだろう?」

「暁はみかん頭じゃないよ。オレンジだよ」

「同じことじゃないか」

「3日後に小惑星帯の基地付近に、海賊たちが来るってさ」

「占いでか?」

「暁は予知能力を持つアンドロイドなんだよ。知ってるでしょ?」

「あくまでもそれは予知にしかすぎん」

二人は夕食を摂りながら、目の前の立体スクリーンを見つめた。

小惑星帯に映る、無数の太陽系連合の居住区と基地の位置が映し出

されている。

「じゃどうするの？」

「予測は不可能だ。だが、インチキ占いを信ずるわけにはいかない。みかん頭から俺に別のメッセージがある」

「なに？」

「なにか悩みことがあるとか」

「、、、、」

「言ってみなさい」

アステロイドベルト基地ケレスに進路をとったその船は、姿を消したまま、ケレスに近づき、照準を合わせた。

「ケレスを破壊する。太陽系の要の1つだからな。いいだろう？」

コバルトブルーの長いストレートヘアを後ろ手で1つに束ねた男が微笑した。

「あの要塞は、多くのエスパーたちがいますが、、、、」

「連合政府のいいなりの犬たちだ。それにこれからの戦いに彼らがいると我々の不利になる」

「ではキャップの意のままに」

周りの彼らは、青い髪的青年に逆らう風はなかった。

ケレスには5000人ものエスパー戦士たちが所属されている。にもかかわらず、この不意の攻撃を回避できなかったのはなぜなのか？後世その謎が語り継がれた。

攻撃は3日後ではなく、当日だったからだ。

その夜、二人は寝室でその事実を知った。

結局はなるようにしかならない。先のことは心配するな。

抱きしめられ、深く愛し合った後。

そう言われて納得した矢先のことだった。

衣服を再び着用した彼らは、小型艇で宇宙に飛び出す羽目となる。

「どうして、予測できなかったんだろう」

「敵の能力が一枚上手なんだ。くやしいがな」

「暁の店つぶれるかも。インチキ占いだから」

「まったく。もともと信じてもないがな」

「LARKってどういう意味？」

「雲雀、、かな」

「そういう文字が海賊が荒らした宇宙船に落書きしてあるって噂だけだ」

「60年ほど前、LARKという名の宇宙戦艦が、外宇宙で遭難したことがある。その乗組員全員がエスパーだったが、太陽系連邦政府は、全員を抹消する命を下したそうだ」

「どうしてそんなひどいことを」

「さあ、、親父の前の代の主席だったからな。人間だった彼はエスパーたちの能力を使いこなす前に、恐れたんだろうな」

「幽霊、、じゃないよね？彼ら」

小型艇の脇の舷窓から見える、遠ざかる碧い冥王星を見ながら、シルビアは不安げに尋ねる。

60年も前からの怨念が今ごろどうしてよみがえってくるのか。

「LARKは、いつか人類すべてを皆殺しするという声明を銀河ネットに流したらしい。20年ほど前のことだ」

「それが今年ってこと？」

「、、、そうかな？どうする？」

「どうするって、、わからないよ」

「だから、なるようにしか、ならんדר？」

目の前の問題を少しずつでも解決していくしかない。彼女は遠ざかりけし粒のようにきらきらと光る、太陽系最果ての惑星のサファイアブルーの煌めきをただ、見つめるしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0634z/>

緑色のPianissimo

2011年12月2日14時51分発行